隔号連載

森とカテドラル

―der RHEIN と la SEINE の間で― 18

紀元前５世紀頃から始まったケルトの第二鉄器文化、ラ・テーヌ文化はヨーロッパ全土に広まっていく。ラ・テーヌ文化がアルデンヌ高地を越えて北の沃土地帯に降りて来たとき、ゲルマン語を話すゲルマン人もまた、ライン河の西側に移って来たと考えられている。後のベルガエ族に繋がるこれらの人々は、ラ・テーヌ文化を携えて、ブリタンニアにも渡って行く。前４世紀「海洋論」の後代の写しにその一部族名がブリタニと記され、そこからブリタンニアの地名が生じたと推測されている。

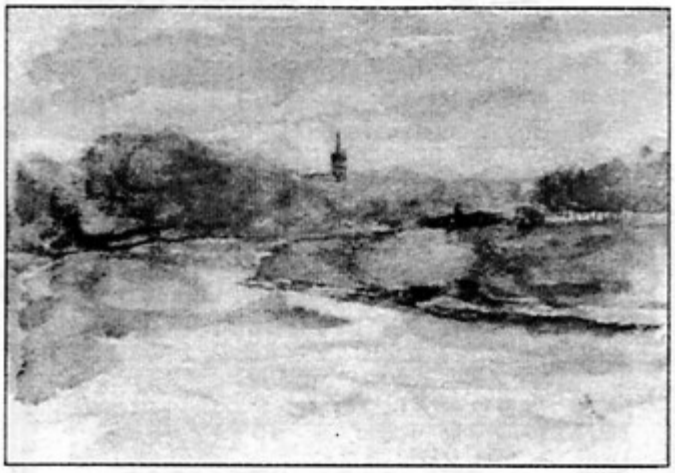
ゲルマン語も他のインド・ヨーロッパ語族と同じように先住農耕民族の言葉と混淆することによって独自性を得たと考えられてきた。鉄器時代になって、西バルト海沿岸部、オーデル川とエルベ川の間、ユトランド半島、スカンディナヴィア半島南部に定住したゲルマン社会は、その発生の頃からケルト社会と共存していたと考えられるようになった。

西ヨーロッパの地名から先史時代の言語を研究した H. クラーエによれば、ライン河流域から南ドイツ山地にかけて、ゲルマン人とケルト人との間に密接な文化的関係が在ったことが判るという。

ケルト人の先祖もゲルマン人の先祖もライン河の元の名 *Reinos を知っており、それぞれの言語の規則にしたがってこの名を発達させたのだという。同じようにドイツ中南部の山地もゲルマン語から中世ドイツ語に、ケルト語からラテン語に変換した呼び名を持ったが、これにも「オーク山脈」を意味する共通の原形があるという。ケルト人もゲルマン人もそれぞれがライン河やオーク山脈とかかわりを持っていたことになる。

このゲルマンとケルトが共存した地方では、後にフランク語が生まれ、現在のフラマン語（オランダ語）とドイツ語のライン・フランケン方言との近似関係に繋がっていく。

クラーエによれば、ムーズ（Meuse）川とマース（Maas）川の名も、太古からの名がケルト、ゲルマンそれぞれの言語の規則にしたがって発達したものだという。ゲルマン語特有の変化を持たない名のモーゼル（Mosel）川より前に、ゲルマン人はマース川（おそらくその下流）を知ったことになる。



de Maas

Maas川を渡ると〈これはそのまま Maastricht マーストリヒトの意味になる〉、起伏のない沃土が続く。ローマは、ケルンから、マーストリヒト、トンヘレン、コルトレイク、カッセルを経て、ブローニュに至る幹線道路をここに敷いた。ブリタンニア（特にコーンウォール）で採れる錫を運ぶために、青銅時代から重要な交易の道だったに違いない。

この地でゲルマン人とケルト人が共存し始めたのが、それぞれの歴史のごく初期だったことは真に興味深い。後にベルガエ族と呼ばれ、やがてフランク族に連続していくゲルマン・ケルト共存文化の流れを見ることは、ベルガエ族＝ケルト人、フランク族＝ゲルマン人という断絶した概念から離れることになるのかも知れない。

泉や池が続く、ブリュッセル郊外の Hoeilaart（フイラート）市は、昔の地図を見るとその 音 に合わせた表記が様々にあることがわかる。市役所が説明する歴史では、フイラートの名の由来を、ベルガエ族がケルト語を話したとして「森の中の草地」、あるいは「平地」という意味のケルト語としている。しかし、ゲルマンの民間伝承のなかで、水の精（河童のようなもの）がホウとなくのでホウラートと呼ぶところがあることを知り、その方がぴったりだなと森の中で思ったりしている。

画家　五味政明